
真・恋姫無双 ～六文銭と乙女達の三国志演義～

ジオニックフロント

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 ～六文銭と乙女達の三国志演義～

【Nコード】

N6426M

【作者名】

ジオニックフロント

【あらすじ】

仁を持って徳を成す白、信を持って義を成す紅。二人の御使いが乱世を沈静す。数年前に傭兵集団『真田傭兵軍』を立ち上げた真田幸成。そんな彼の下に、友人が一人、依頼を持ってやってくる。それがこの物語の始まりだった。

第一話 とある傭兵依頼と酒飲み勝負（前書き）

もうまもなく、萌将伝が発売！！ってことで、以前いたずら書き程度に考えて物をこの際だから載せちゃおうぜ！？ってことで乗せました。

リリなのもあるのに馬鹿なの！？死ぬの！？って思ってる方、ご安心をどちらも完結させるつもりでいるので気長に待ってくださいorZ
なお、作者は文才がありません。矛盾、ご都合主義など多々あるかも知れませんが、それでもいいと言う方のみお読みください。それ以外の方は回れ右でお願いします。

では、本文をドゾ

第一話 とある傭兵依頼と酒飲み勝負

「月が、洛陽に？」

「せや、何進からの要請があつてな。ウチの大將はそれ受けたんや」

涼州の外れ、俺達が拠点としている小さな砦に俺が最前にしてもらっている涼州の太守董卓の所から張遼が使いとして来ていた。

俺がこの地に降り立ってから2年。始めのころはまさかここが三国志の世界とは思ひもなかったが、実際に黄巾党の事件を身をもつて体験すると否応も無く納得させられてしまう。

そして今回の月、つまり董卓の洛陽入りは史実で言う反董卓連合軍の前触れなのだろう。だが、この世界の董卓は気の優しい少女である。そんな彼女が悪政を敷くとは考え難い。ま、理由なんてものはどうにでも出来る事ではあるが。

そもそも何故、張遼がここに来ているかという、董卓軍の主だった將と俺は旧知の仲であり、互いに協力し合う関係であるからだ。協力といっても、こっちが向こうに金で雇われるという形だが。

「んで、俺たちにどうしろと？」

「そこや、今ウチの軍は前の黄巾党の一件で兵の数が減ってしもうててん。せやから、ウチらに協力してくれへん？」

「なるほど・・・。」

涼州内の事であればサッと対応し協力する事もやぶさかではないのだが、涼州を外れ洛陽となると話が違ってくる。これはアイツに相

談するしかないか・・・。

「ふむ、ちょっと待っててくれ。誰か在るか！」

すると兵卒が一人、部屋の中へと入ってくる。

「ハッ、何か？」

「此処に王允を呼んでこい。至急で頼む」

「御意」

一礼をするとソイツは静かに部屋から退出し王允を呼ぶため駆けていった。

しばらくすると部屋の扉が開き、王允が中へと入ってきた。

「幸成様、お呼びですかぁ？おやぁ、霞殿ではないですかぁ！お久しぶりなですよ」

「おお、美々か。久しぶりやなぁ。元気にしとったか？」

「それはもちろんなのですよ。で、ご用件はなんなのですかぁ？」

「ああ、実は――」

先ほど霞が説明した事をそのまま美々美、つまり王允に話す。

「なるほどなですよ。」

「で、俺達はどうすべきかをお前に聞きたいんだ。」

すると美々美は少し考えるように唸るところ切り出した。

「恐らくですがあ、幸成殿は月殿に協力するのは構わないのですが、そうなると五胡への抑止力が無くなるとお考えなのではあ？」

「ああ、そうだな。だからお前を呼んだんだ」

「でしたらこんなのはどうですう？まず我が軍は騎馬や歩兵を合わせて30000ですう。そのうち半分の15000だけを幸成殿に率いてもらい残りはここに留まってもらうのですよう」

「なあ、貸してくれて頼んどるウチが言うのもなんやけど、半分残してそれを引きいるヤツいるんか？」

「んー、まあそれはなんとかなるだろ。んじや霞、俺達は騎馬隊を含めて15000を率いてそっちに合流する。」

「ん、わかったわ。おおきにな」

「んじや、話はこれくらいにして。疲れただろ？部屋を用意してある案内させるから休んでくれ」

「ほんなら、お言葉に甘えよか」

「ああ、そうしてくれ。城下に降りてもいいが夜には戻ってくれよ、宴会の準備をさせてるからな」

「ん、了解や。ほな後でな」

「ああ」

案内の侍女に連れられ、霞が部屋を退出する。それを見送った俺と美々は誰を将として残すかを話し合う。

「さて、此処に誰を残すか。誰か候補はあるのか？」

「それはもちろんなのですよう。というか同じ人物を思い浮かべているのではあ？」

「んー、姜維か？」

「正解なのですよう」

姜維、字を伯約。史実では魏に仕えた後、蜀へと降り諸葛亮の後継として名を馳せた武将だ。

数ヶ月前に仕官してきたばかりだが、人望もあり周りから一目置かれていた人間である。

「ふむ、姜維なら任せても大丈夫だろ。俺から話を通しておくから、お前は連れて行く兵達の準備をしておいてくれ」

「御意ですう」

美々との話の後すぐさま俺は姜維にもとへと足を運んでいた。辿り着いたのは武器庫、どうやら武器の点検をしていたようだ。

「志乃、今大丈夫か？」

「はぁーい、今いきまーす。」

声を掛けると奥の方から小走りで掛けてくる少女の姿。

サイドテールに結った薄いブラウンの髪に淡いサファイアブルーの瞳。身長は平均的、性格も明るく活発な彼女こそが俺が探していた姜維、真名を志乃という。

「なにかご用ですか？幸成様」

「ああ、折り入ってお前に頼みたい事があるんだ」

「なんです？はっ、まさか今夜の閨のお誘いですか？そんな・・・でも、幸成様なら・・・キャ／＼／」

頭の回転も早く勤勉、武も自前の三尖槍を振り回し多くの敵を討ち取るなど申し分無い、だが唯一欠点を挙げるとすれば、少々日常生活に置いて早とちりなところがあるのだ。

ゴスン

「痛いッ!？」

「バカタレ、んな訳あるか。お前には俺がいない間、この軍を率いて貰いたいんだ」

「へ？どういうことですか？」

うう、と頭を抑える志乃に俺は先ほどの会議で決定した事を事細か

く説明し、その間に志乃に残った軍を率いて欲しいと言う事を述べた。

「ということは志乃はお留守番なんですか？」

「ん、まあそうなるな」

すると志乃は口でガビンといってその場に崩れ落ちた。
というかガビンなんてよくそんな言葉知ってるのな。しかもかなり古いし・・・。

「し、志乃は知らない子なんですか……。役立たずなんですね……。。」

「なあ、なんか勘違いしてないか？」

「へ？」

キョトンとした顔で俺を見上げる志乃。目にはうつすらと涙が浮かんでおり、思わず抱き締めたくなる衝動に駆られる俺は間違っていると思う。

「俺はお前がいらないから置いて行くんじゃないやなくて。俺が居ない間此処を任せられるのはお前しかいないと思って頼んでるんだ」

「そ、それじゃ志乃は知らない子じゃないんですね？」

「ああ、むしろ信頼してる」

「それなら大丈夫です……。でもやっぱりお留守番はイヤです」

「それじゃ、こうしよう。俺が帰るまでにお前がちゃんと此処を率いる事が出来たら何でも願い事を一つだけ叶えてやる」

「ホントですか？」

「ああ、嘘は嫌いだ」

「わかりました！！この姜伯約、立派にお役目を果たしたいと思っています！」

立ち直ったのかピンと背筋を伸ばし大きな声を上げる志乃。
こういうところはかなり評価できるんだけどな。

そして夜。

広間に並べられた卓には様々な料理が置かれており、それを霞を含めた主要な将が囲んでいた。

「さて、今日は無礼講で構わないぞ、いっぱい食べていっぱい飲めよ！！乾杯！」

『かんぱ〜い』

「なあなあ、幸成あん細長いのなんなん？」

「ん、あれか？あれは豚肉を挽いて羊の腸に詰めたヤツだ。美味しいぞ、そしてなにより酒に合う」

所謂、ソーセージってヤツだ。酒のつまみにはもってこいの一品だ

と思う。

「お、そうなん！？なら早速・・・あむ、ムグムグムグ・・・ゴクゴクゴク・・・ぷはぁ、ホンマや！！かなり美味しい酒にも合うなァ！！こんな知らなかったわ」

グイッと杯いっぱい注がれた酒を一気に煽りそう感想を述べる。

ソーセージにはビールが一番なんだが生憎そんなものは無いので、普通の酒で我慢している。

とは言っても、現在俺専用の食品工房ではビールや日本酒と言った、この時代ではまず味わえない酒を製作中である。

「まあ、そりゃ当然だろ。それは俺が作ったモンだからな」

「ほへー。なんや幸成は物知りやなァ」

「まあ、色々あってな。そうだ、今この辺じゃ珍しい酒を造っててな、出来たら霞にも飲ませてやるよ」

「ホンマに！！何時、何時できるん？」

「ん？そうだなァ・・・あと二ヶ月か三ヶ月後ぐらいか？」

「ほんなら約束や、破ったらアカンでえ？」

「おう、分かったよ」

「わーい、ありがとー。だから、幸成メツチャ好きやねーん」

「ちょ!?! おい、うおおおッ!?!」

飛びかかってきた霞を支えきれずそのまま後ろへズデンと倒れてしまう。

「ああッ!! 幸成様に何をするんですかー!!」

その声に起き上がるとそこに居たのは徳利を一本持った志乃が立っていた。そして志乃は霞をビシッと指を指し

「幸成様から離れなさいい」

「んあ、なあこの子、誰なん?」

「ん? ああ、アイツは姜維、字を伯約ってなこの間仕官して来たばかりだけどな実力は指折りだぞ?」

「へー、そうなんや」

すると何を思いついたのか、ニヤと意味深な笑みを浮かべると再び霞は俺に抱き付いてきた。

「なあー!!?! 一度ならず二度までもーッ!! なんてうらやまS・
・じゃなくて失礼な事を!?!」

「にゃはー、うりうり」

さらし越しにムニユムニユとした柔らかい感触が俺の腕を刺激し、意識しないようにしても自然とそっちへと意識がいつてしまう。

「むきー、それは志乃へのあてつけですかこのおっぱいお化け!!」

「へへーん、つるぺたが何言っても負け惜しみにしか聞こえんなあ」

「ううー、こうなったら勝負です!!」

勝負という一言に興味を引かれたのか、霞も少々乗り気になってきていたのか、目つきが微妙に変わっていた。

「今は宴会の席、ならば勝負はこれに決まりです!!」

そう言って差し出したのは先ほどから持っていた徳利。中身がまだは言っているのか中からちゃぷんという音が聞こえてくる。

「ほー、この張文遠様に酒飲みで勝負とはエエ度胸やないの」

するといつの間に用意したのか大量の徳利の置かれた卓が二つ並ぶように置いてある。

周りの兵達もいいぞーやれー、とか俺は張遼様に賭けるぜ、いや、折角だからあえて俺は姜維様にするぜなど聞こえてくる。

「ちょ!? つか誰だよこんな用意したのは!?!」

「私ですよ」

その声に振り返るとそこにはニタリとした笑みを浮かべる美々美の姿。

「なんでこんな事を?」

「まあ、一言でいうならば面白そうだったのですう。あ、ちょっと失礼しますですよ」

いきなり何をすると思うと胡坐をかいて座っているその上にちょこんと座る美々美。

「ん？あ、ああ。なんだよいきなり？」

「ふふ、なんでもないですう。あ、どうぞ」

「あ、悪い」

そう言いながらも酌をする美々美の顔は何処かしてやったりというような笑みを浮かべていた。

「（今回は私の一人勝ちなのですよう、お2人共・・・）」

「？」

未だに続いている酒飲み対決を眺めながら酒を一気に煽る。
美々美の不可解な行動も気になるが、別に問題ないかと思ひ思考を打ち切り、一言漏らす。

「ま、いいか」

こうして夜が更けていった。

ちなみ勝負の結果は霞が勝ったが翌日は両名とも二日酔いで一日中寝ていたのは、全くの余談である。

それから数日後の朝。

俺達は涼州の本拠で待っている董卓軍へと合流すべく、5000の騎馬隊と歩兵などを含めた10000、合わせて15000を従え出発しようとしていた。

「さて、留守番は頼んだぞ？」

「はい、頑張ります。ですから、約束破らないでくださいよ？」

「ああ、分かってる。五胡に関しては馬騰殿に文を送ってあるから向こうの指示に従うように、あとはお前が決める。」

「御意です」

「うん、じゃ行ってくる」

「はい、いつてらっしゃいませ!!」

志乃に見送られながら、霞を含めた俺達は董卓軍と合流すべく皆から悠々と出陣した。

第一話 とある傭兵依頼と酒飲み勝負（後書き）

いかがでしたでしょうか？

誤字脱字、アドバイス感想などお待ちしております!!

第二話 とある鬼神と共闘昔話（前書き）

アハハ・・・。

すいませんでした!!（土下寝

これ以外、言葉が浮かばない・・・。

とりあえず、本文をどうぞ!!

第二話 とある鬼神と共闘昔話

砦を出立してから数日、天水へと到達した俺達は、月率いる董卓軍と合流し、無事洛陽へと辿り付いた俺達にまず目に移ったのは、その活気の無さだった。

出歩く人影も少なく、開店している店も少ない。此処が本当に首都と言えるのだろうかと思っほほどの荒廃具合である。

この惨状の理由は簡単な事だった。積み重なる重税と官吏の横行。それにより洛陽へと近寄る商人が減り、多くの住人が洛陽から逃げるように居なくなつていった事が原因らしい。

俺達の最初の仕事は街の復興となった。

私腹を肥やす宦官や文官、役人を肅清し領地や財産を没収、その金で街の復興や城壁の修復に充て、高すぎる税率を下げ、難民や職の無い人達に仕事や家を与えると見る間に街に活気が戻り、数ヵ月後にはなんとか首都と言えるような街の営みが出来るようにまで回復したのであった。

そしてさらに時間が経過したある日の事だった。

「・・・なあ、まだ食うのか？」

「はむはむはむ・・・（コクコク）」

午前中の政務も終え、たまには外で昼飯を食べようと城下に降りていた。その時一緒になったのが、今、俺の目の前にいる少女、恋と呂奉先だ。董卓に仕えている将の一人で、大陸で最強の武を持っているのは彼女だと言えるだろう。以前から面識があり、共に戦場に立った事も多々ある。

「・・・どうしたの？」

「いや、なんでもない。そういえば、ねねはどうしたんだ？一緒にやないのか？」

ねね、というのは恋に付き従っている軍師で、名前を陳宮、字を公台、真名を音々音といい、ねねねと言いくいのならばと自然とねねで通るようになっていた。

「仕事、まだやってる」

「そうか・・・」

常に恋にべったりなねねが珍しいな。それほどまでに仕事が溢れていたのだろうか？

そんな俺の考えを尻目に次から次へと料理を口へと運ぶ恋。そしていつの間にか卓の上に空になった皿が高く積み上げられていた。

そんな状況から逃避するように、オレは恋と共に戦場に立った時の事を思い出していた。

荒野にたなびく黄巾の旗、およそ8万。

他の州に気を取られすぎていた諸侯を含む官軍は、この事態に一切気付く事ができないでいた。

だが、そんな大群の目の前にたたずむ4人と犬2匹と巨大な馬が1頭。

そう、オレと恋達だ。

「・・・・・・・・・・」

「恋殿、幸成殿。黄巾党の中枢でなにやら動きがあったようですぞ？」

「どおしますかぁ？」

ねねとみみの問いかけにオレと恋は顔を見合わせ、コクリとうなづく。

「・・・・・・・・ねね、下がる」

「みみ、お前もだ」

「イ、イヤですぞ！ねねは恋殿を守ります」

「ねね、無理を言うてはダメですう。恋さんはお強いですから、それに幸成様もいますから、ね？」

「・・・・・・・・うん。だから、ねねは後ろから見守ってるだけでいい」

「ううゝ、恋殿ゝ・・・」

「・・・・・・・・早く」

「は、はいですぞー!!」

「みみ、お前もだ」

「御意ですう。じゃ、行きましょうか」

「わかったのです」

2人が後ろへと下がって行くと、今度は向こうから派手な衣装に身を包んだ3人の少女が此方へと歩いてきた。

どうやら、ここに佇んでいたオレ達が不振に思えたのだろう。メガネをかけた少女が此方を観察するようにじっと見ている。

「・・・・・・・・雨を、待ってる」

「雨え？」

「お天気もいいし、雨なんて降りそうにないと思うんだけど・・・」

「・・・・・・・・（フルフル）」

首を横に振り、否という返答を表す恋。ああ、雨とはそう言うことか・・・・・・・・。

そして、しばらく話がまた続く、どうやら官軍と黄巾党との衝突で戦場になるかもしれないからと、忠告をしに来てくれたらしい。この一団を見るにある程度しっかりとした統制が取れていることから、街や行商人を襲っているのは暴走した末端か、便乗した連中のようなのだ。

「最後に、名前だけ教えて？」

「・・・そっちの名前は？」

「えっ？」

「名を聞くならずには自分が名乗ってから、それが礼儀だろう？」

「あ、確かにね。えっとね、私が張角だよ？それで、こっちの子が張宝ちゃん、メガネの子が張梁ちゃんだよ」

「ッ！？まさか、ここで黄巾党の3トップが釣れるとは思わなかったな。この先、大きな町は洛陽しかないし、狙いはそこで間違いないだろう。」

「ちょ、姉さん！？不用意に名前を言わないでって普段から言うるでしょ？」

「えー？でもー」

「まあ、いいじゃない。で、次はあなた達の番よ。・・・名前、教えなさい」

「・・・呂奉先」

「それで、オレは真田幸成ってんだ。よろしくな？」

「あれー？お姉ちゃん、その『りよほうせん』と『さなだゆきなり』って何処かで聞いた事あるよー？」

「あっ！？呂奉先と真田幸成ってまさか！？」

「どうやら、気付いたようだ。恋ならともかく俺のまで知られているとは思ひもなかったが。
なら、まあもう一度ちゃんとした自己紹介が必要かね？」

「董卓軍所属、第一師団師団長、呂奉先」

「傭兵団真田軍、頭領、真田幸成」

「「目標、北上する黄巾党の殲滅」」

「張角、張宝、張梁、3人とも」

「三途の川の渡し賃はオレ達が払ってやる、姉妹仲良くあの世に行きな？」

「「「――ッ！？」」」

「て、天公將軍様！！ここはオレ達に任せてお下がりください！！
お、お前ら張角様たちを守るんだ！！」

「「「おうッ！！」」」

「ねね」

「みみ」

「旗を」

「御意ー！ーい！！」

蒼天に掲げられた深紅色の2つの旗。1つには『呂』と言う文字が1つ、もう一方には金の糸で刺繍された『六文銭』の印があった。

「遠からん者は音にも聞け！！近くば寄って目にも見よー！！」

「蒼天に翻るは、血で染め抜いた深紅の呂旗！！」

「天高くそびえ立つ深紅の軍旗、金に輝く六文銭は真田が家紋！！」

「天下にその名を響かせる董卓軍が一番槍！！」

「数多の敵を屠り、未だに折れる事のない信義の槍！！」

「悪鬼はひれ伏し鬼神も逃げる、飛將軍呂奉先が旗なり！！」

「日の本一の戦人、真田幸成が御旗なり！！」

「天に唾する悪党どもよ！！その目でとくと仰ぎ見るが良い（のです！！！）」

「深紅の・・・呂旗！？」

「六文銭紋・・・・・・・・ツ!!」

「我等が使命は獣の屠殺。遠慮はいらない・・・、かかってこい」

「殺して解して並べて揃えて晒してやんよ」

「ねね、みみ、下がれ」

「御意です、ご武運を!!」

恋の指示で2人は神楽の近くまで下がる。馬とはいえ雑魚兵程度に負けるようなヤツじゃないし、みみも自衛程度なら戦闘もできる。心配する事はないだろう。

そして、敵が7万近くに対しこっちは恋とオレの2人だけ。まあ、遅れを取る事はないだろうが、些か面倒ではある。ふむ――。

「・・・恋、賭けをしないか？」

「・・・賭け？」

「そう、賭け。敵は8万弱、こいつ等を1人でどれだけ倒したかを競うんだ。負けたら、そうだな・・・。相手に飯を奢るってどうだ？」

「・・・・・・・・わかった」

「よし、それじゃ・・・」

お互いに武器を構え、こちらへと向かって走り来る敵を見据える。

「ぶっ殺せー！ー！ー！ー！ぐはぁ！？」

2人同時に突っ込んできた1人を斬り捨てる。

「開始だ」

オレの声に一斉に動き出す。

それから始まったのは一方的な蹂躪だった。

1人だろうと複数人だろうと腕が削がれ、足を切り落とされ、胴が真っ二つになり、首が宙を舞う。それは、獅子が獲物を狩るのではなく、ただ戯れに弱者を蹴るだけの、組み立てた積み木を突き崩すような児戯に等しい惨状だった。遊びに夢中な子供のように、ただ黙々と、ひたすらに薙ぎ、払い、突く、そして切る、斬る、伐る、キル、Kill。

やられる側としてはまさに悪夢のような有様だろう。おそらく数日は夢に見るだろう。まあ、生き残れたらの話ではあるが。

もとからなのか、オレの提案した賭けのお陰なのか、やる気に満ち溢れている様子の恋。彼女が戟を振り下ろすたびに黄巾党のやつらが爆音と共に宙を飛んでいる。

こうしている間にも、ちやくちやくと黄巾党の数は減っていく。屠った数は2人合わせて、7万と言ったところだろうか？残り1万。このペースなら、夕餉前には拠点に帰れるだろう。

「バ、バケモノめ・・・！！だが、相手はたった2人！大人数で囲めば・・・！！」

「行くぞ！！黄天の世のためにつ！！」

「蒼天すでに死す！！黄天まさに立つべし！」

「ハッ、戯言を……。蒼天は死なねえよ」

「……………しかして駆けるは羽虫にあらず」

「蒼天ってのは、龍が翔ける場所なんでね」

「だから——」

「——羽虫はここで死ね（んどけ）」

まあ、そのあと結局張角達には逃げられたけど、あのお陰で大陸中にオレと恋の名前がさらに広まったんだよね。そのせいで、恋には『鬼神』、オレには『赤鬼』なんて大層な異名までついたし……。

賭けの結果？勝ってたらわざわざ大食らいの恋に食事なんて奢るかよ……。

「もつきゅもつきゅ……。？（コテン）」

「いや、なんでもねえよ。こっちの海老シュウマイも食べるか？」

「・・・・・・・・（コクコク）」

しばらくは贅沢できねえな……。賭けなんて提案するんじゃないかな
ったぜ……。

まあ、今は楽しいからいいけどさ。

第二話 とある鬼神と共闘昔話（後書き）

いかがでしたか？

バカみたいに鈍亀以下ですが、完結まで持っていく気はあるので読んでくれている人は気長に待っていただけると嬉しいです。

もう一方の「リリなの」の方も頑張りますんで応援お願いします。

誤字、脱字、感想、アドバイス、応援など待ってますんでお願いします。

では、また

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6426m/>

真・恋姫無双 ～六文銭と乙女達の三国志演義～

2011年10月7日01時59分発行